

アルプスの高距山村 ホッホタル アベルスのユフ

山 口 源 吾

I 緒 言

世界の高連山地における集落の高距限界の調査研究は、地理学者の特別な関心事である。

日本のように、低平地はすでに完全開発されて、残る山地に将来の経済開発・居住空間を見出だそうとするところでは、山地の土地利用と終年定住の可能性の研究はますます重要事となる。

筆者は先に「高距限界集落」を著わして、中央日本山岳地域における高距山村の生活態様の現況と分類型の高度限界を示したが、海外諸国の山地集落の実態を知るために1971年と75年の二度にわたって渡欧し、特にスイスアルプスには延40余日間滞在して現地調査をした。

その報告は自己の調査不備から今日まで発表の機会を持たなかったが、いま不完全ながらその一部を記録に留めておきたいと思うようになった。

研究対象地域は Hochtal Avers にある Juf である。

スイスアルプスでは質朴な農民が自然処与の土地条件に適応し、自己の身体的・精神的意志行為によって、あの巨大な高距地域に堅実なアルプ経済と定住集落とを樹立しているのである。

以下 Juf を中心に、アルプスの最高定住集落の立地と経済態様について筆を進めることにする。

II 位置と到達度

Juf は Vater Rhein の最奥の村である。ラインはスイスの河港 Basel から上流に向って国内の幾つかの支流を集めながら、白鳥の浮ぶ Bodensee を漕ぎ、さらに南する。鉄道沿線には小さな畑が断続し、小麦・とうもろこし・馬鈴薯や時にはりんごや桜桃などが見られる。川は Landquart・Chur などの小山間盆地やその間に峡谷を作り、Rheichenau で Hinterrhein の支谷を分つ。

Hinterrhein の小さな田舎町 Thusis で鉄道に別れを告げバスに乗る。Postauto は日本の山間のバスよりは大型で前向き三人掛でゆったりとしている。車はさらに南に Rhein Posterior に沿って走る。Roflaschlucht 付近で谷はすでに高度 1,000m を越えいよいよ峡谷となる。谷はここで二分するが、東の Rhein d' Aoers 沿になお南下すると Cröt の小村に達する。Cröt から南東方へ、Averser-rhein に入ると標高は更に 1,715m、日本の定住集落の高距限界を越えている。

Cröt の西部に走る峭壁は Madrisertal Val Madris でこの山稜の西部はイタリア一領である。Cröt の上流 Am Bach (1,959m) で運転手は道端に遊ぶ自分の二人の子供を乗せる。のどかな運転である。交通量は少なく車内乗客数名となる。そして車はいつしか Hochtal Avers に入る。

Am Bach, Juppa から Podestatsch Haus を過ぎると間もなく目的地 Juf に着く。Juf は前記小 3 村と共に Gemeinde Avers を構成し、全村は氷河谷底にある。

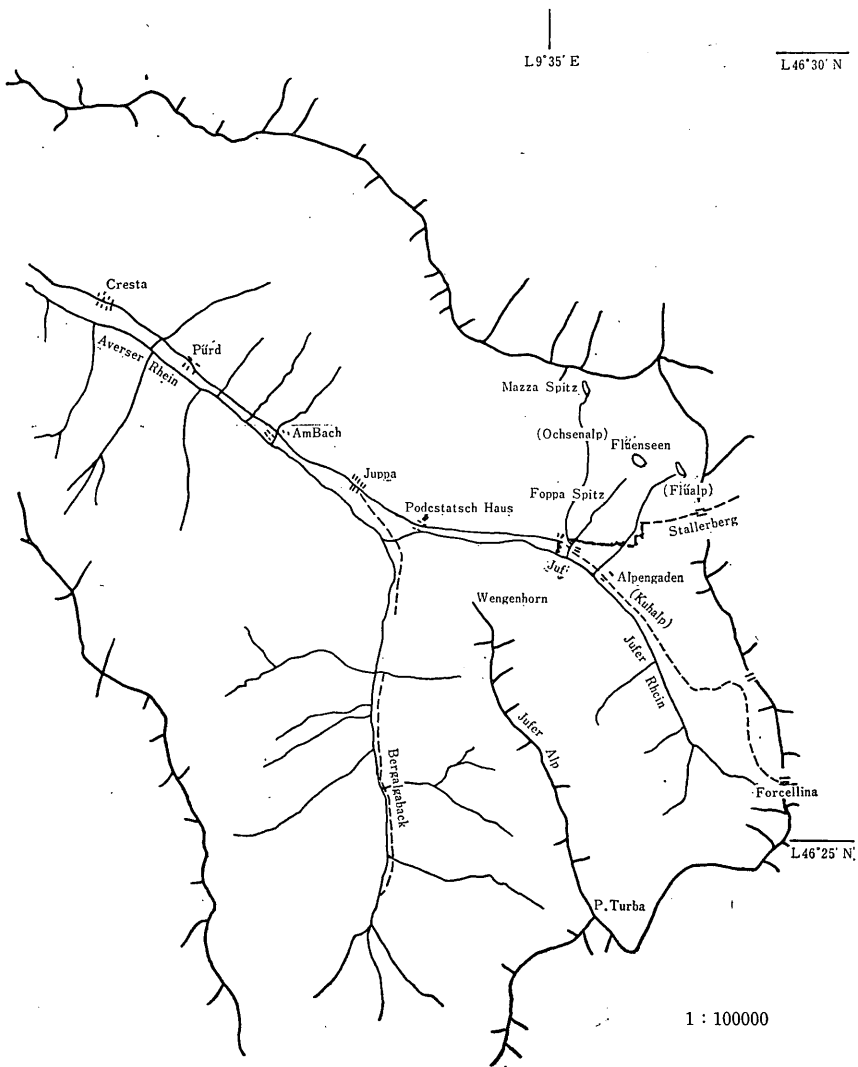
鉄道駅のある Thusis からバスでの時間距離は Juf まで 2 時間半、料金は日本での約 2 倍余であった。(1971) 集落の位置が鉄道幹線から遠く物資の購入に多くの費用を要する点で、日本の山地集落に比して到達度は劣る。

III Hochtal Avers の開発とアルプ経済

ヴェイラー Juf の発生は Hochtal Avers の開発に伴うものであった。次に谷の開発の発生論的考察のため、知り得た 2, 3 の事例を記述することにする。

アルプスの高距山村ホッホタル アベルスのユフ

Hochtal Avers の Juf



アルプスの高距山村ホッタル アベルスのユフ

Avers の開発はおそらくイタリーと諸交渉を持つ人々によるものと思われる。17世紀中葉、谷の開拓先端となったのは Podestatsch haus (2,042m) で、この孤立荘宅に開発資料がある。

この家のシュトラピッシュ (Strubische) 未亡人は300年前祖先の造った屋内に導き、その古い調度品を見せてくれた。機具の多くは牧牛に関係するもので羊毛紡績車、織機・ミルク桶、大小の Kuh-glocke 等であり、これ等によって開拓者の経済形態が伺われる。

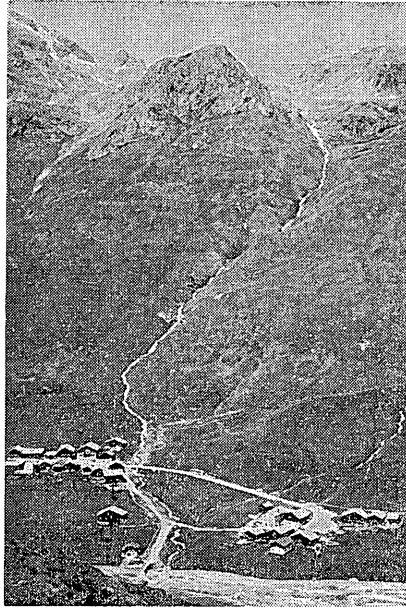
また開拓事情と年代に関しては次の六行の文字が挙げられる。ここの家屋は一階は石造・二階は木造であるが、その二階の漆喰壁に下記のラテン語の文字が書かれている。

HOSTIBVS INVITIS
VIVAT STRVBEA
PROPACOAGE REET
PATIFORTIA STRVBE
VM EST \\\
1664

文章の最後の1664は入植年度が家屋建築の年を現わすものと思われるが、文字の判読は難解である。質問に対し夫人は回答の代りに次の文章を手書してくれた。„Zum Trutze der Feinde lebe das Strubische Geschlecht, ein Tapferes zu tun und schwers zu erdulden ist Strbeas Sitte.“

このスイス・イタリー交界地域では17世紀当時はおそらく開拓と防備は農民の兼務であったであろう。„外敵防禦のためにシュトラピッシュ家はここに居住す。勇敢に戦い困難を堪え忍ぶのはシュトラピッシュ家の作法なり“とは、わが国の北海道開発における屯田兵を思わせるものがある。

Avers はスイスにおける最も高距な政治的自治団体であるが、その中心 Cresta はホテル2・商店1・三等郵便局1・学校1・教会1・人口45人の田舎町



ユフの全景

最下部の白帯は、Juferrhein、中央を上下に落下するは Mühlbach、右から流入するは Müttenbach、Bach の右側は、Unter Juf、左側は Ober Juf である。集落の四周は Wiese。

である(1971)。開発当時ここはアルプスの移牧基地の一つで、夏のアルプに至る途中には夏村や冬村が置かれ、Podestatsch haus はその一つであった。そして19世紀の中頃までは Winter dorf であったが、1862年6月には定着し、ついに終年居住の Einzerhof となった。

Avers の住民は Podestatsch Haus や下流の Cresta, Am Bach に住んで春までアルプ行きを待つ。彼等の家畜は Stall とよばれる農家から少し離れた小屋に積まれた干草を食べている。定住村から Maien säss (アルプへの上り下りに途中一時滞在する村一夏村・冬村) へは雪の消える前に、住民は櫓に家財道具や衣類を積み、牛や羊、仔牛を綱でつないで移動する。夏草が伸びると家畜はアルプ

に放牧され各家の家畜は別々に監視されるが、Gemeinde の山羊は雇われた山羊飼に飼育と保管を任かされる。

さてこれ等の牛のミルクからは Alpen Käse が造られ、山羊乳からは Ziger が造られる。

9月下旬になるとアルプの家畜は再び谷底の村に引き下ろされ舎飼された。

Ⅳ ユフの生い立ちと環境への適応

Juf は Avers の上流域 Stallerberg と Forcellina の峠道の分岐点にある。Juf の名称は Joof または Jof の方言から、即ち Joch (Pass) から生れたとされている。古くはここは駄獣や担夫がフォルセリナを越えて Bergell へ、シュタッレルベルクと Val. Bercla を越えて Oberhalbstein へと行ったものであった。

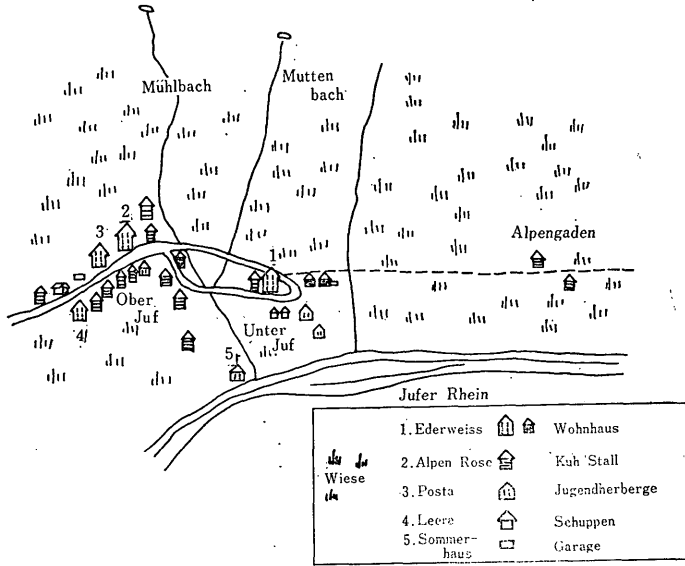
峠道の分岐点は氷河谷底の草原にあり、谷の最奥の Pitz Turba までは 5km あまりもある。この谷底草原にアルプス最高の定住集落が立地したのは何故であろうか。

前述のように Cresta を中心とする Avers の住民は古くから夏のアルプを利用する移牧を行っていた。19世紀中葉には Podestatsch haus は定着し Stall を持つ Einzel hof となり、またその上流にも幾つかの納屋が造られていた。そしてその一つに Winter dorf としての Juf があった。ユフには19世紀末までアルプ管理人が住んでいたが、後には常住しなくなり、その後半世紀間は冬村であった。

Cresta から Juf 方面への歩道は、はじめは断続的な踏分道であったが、Alpladung (アルプへの上り下り) のために時と共に改修され、1925年 Postkusche が Thusis から Cresta まで通じ、更に Am Bach に三等郵便局が置かれるようになるとその間の交通量も増して、ユフは Cresta から1時間半、Am Bach からは45分の徒歩距離となった。

この交通路の開発がユフの終年定住を可能にした。即ちこれは 1~5 月の冬の舎飼に不足する干草を、下流部からユフに補給することができるようになったか

アルプスの高距山村ホッホタル アベルスのユフ



Skizze von Juf

らである。

1948年ユフは再び終年定住集落となった。最初の定住者は Rudolf Menn で、1947～48年の冬を越年した。1950年さらに他の4世帯がこれに倣った。当時この Weiler には4人の学童がいた。この事実は終年定住集落の概念規定を満足させるものである。1965年には Cresta に新校舎ができた。現在(1971)1～9学年生までが在学し、生徒数25・教師1・学級7の中に、ユフからの通学生が3人ある。

標高2,130m に位するユフ周辺は、住民の定住への意志決定にどのような自然処与をなしていたのであろうか。

③ その自然的位置

Juf は Rhein の副支谷 Averser Rhein の奥深く、右岸の日当斜面に立地する。鉄道幹線からは遠く遠く、日本の山村に比して地方中心都市への到達度も著しく劣る。しかしスイスの農民(牧者)は、日本のような重工業に重点を置く都

市生活者とは経済経営形態が著しく異り、いまだに自給的なアルプ経済に依存するから、2,130m という高度も居住上限界として許容される範囲であろう。

⑥ 長い冬と積雪に耐える生活

アルプスの山村では温暖な日本とは異って季節を現わす四季は等長ではない。7月2日 Graubünden の村の広い Wiese の見渡せる丘の上で、一人の老婆は筆者の問に答えてこう言った。「今は春だ。冬が長いから雪溶けの春が待遠しい。」と。7月初旬、スイス山村は正に晩春である。

Juf では春は 5~6 月、夏は 7~8 月、秋は 9~10月、冬は11月から4月までと実に一年の半分である。夏の最高気温は22°C に達するが平常は日中でも20°C を越えることは少ない。冬のユフは日照時間が短かく、日出は午前 9~10時半、日没は午後 1 時半~2 時である。長い冬は寒冷の上に積雪量が1.6~2.0m に達するから春の雪溶けを待ち焦がれる。

時には強烈な Winterstürmen が吹き荒さび 屋根に敷かれた 10数kg の片岩板が吹き飛ばされる事もある。防寒のため住宅や納屋の窓が小さく、新しい建物は二重窓である。

U字谷の谷壁は急斜面で、それを急降下する Lawine や Schneemasse の被害は大きい。1877年3月26日、Wengenhorn の大雪崩は麓の 1 住宅と 2 納屋を壊滅させ、その災害は今日でもこの地域の住民に言い伝えられている。ユフの北側 Foppa Spitz の中腹には新しく鉄製の防崩雪柵が建てられている。納屋の側壁に Eben-höch といわれる防雪堤を付けたものも見られる。しかし St. Antönien ほどに見事なものはない。

積雪は中心地 Cresta と の交通を鎖ざすことがあるが、ゲマインドの防雪車の出動で住民の足は確保される。夏期ユフを訪れる人は、Stall の屋根の上に散在する砂利が、除雪の際に雪と共にロータリー車に吹き飛ばされた道路の砂利と気付くことはまずない。

この長い冬期間、住民は納屋の二階 Clavau の干草で階下 Nuegl の家畜を飼育する。

◎ 水

Unter Juf の住民は村の北西方 Mazzaspitz の西にあるカール湖から流出する急流 Mühlbach を利用する。この急流はかつては製粉用の水車を廻したが今は止まっている。河水は冬でも 3~4°C と温かく、料理、洗濯にも使用し得る。また家畜の飲水としても良い。

Ober Juf では用水を村の西部の Heimwiesen にある一泉源から得ているが、今は簡易水道として一部は Unter Juf にも配水している。

冬の終る頃には水不足が起る。その頃になると家畜は Jufer Rhein で飲水しなければならない。Jufer Rhein は午前中は清澄で飲料水としても使用できるが、午後はやや白濁して常用には適さない。しかし夏には水浴も可能であった。

Mühlbach と Muttenbach (カール湖 Flüeseen が水源) は急な谷壁を落下するが、岩盤の上の薄い風化物は水を滲透して、夏期バッハ付近の Wiese は灌漑草地に似た景観を呈する。

④ 石と木

Hochtal Avers の基盤は Bündnerschiefer から構成されている。ユフはこの片岩からなる平坦な谷底にあるが、住宅や納屋の周囲には一部に防雪のための囲堀や Ebenhöch があり、それにはこの片岩類が使われている。

この片岩の中には帯状に沈澱した大理石や石綿があるが、質が悪いので有効な採掘は行われていない。また隣の Bergalgabach の谷では金属鉱床が発見され一時採鉱されたことがあったが今は止まっている。Jufer Rhein の谷の金属鉱床に関しては未知である。

ユフでは新建築以外の古い住宅や納屋は皆木造である。Hochtal では木材が欠乏している。そのために廃屋や無用の古材が新築用に利用されている。

しかしこの谷には昔は谷奥まで松類の森林があり Stallerberg まで及んでいたが、前述の Bergalgatal における鉱山開発で大量の木材を消費したために消滅したと伝えられている。

現在 Hochtal Avers の森林は主として Cresta の谷に制限されていて、その

アルプスの高距山村ホッホタル アベルスのユフ

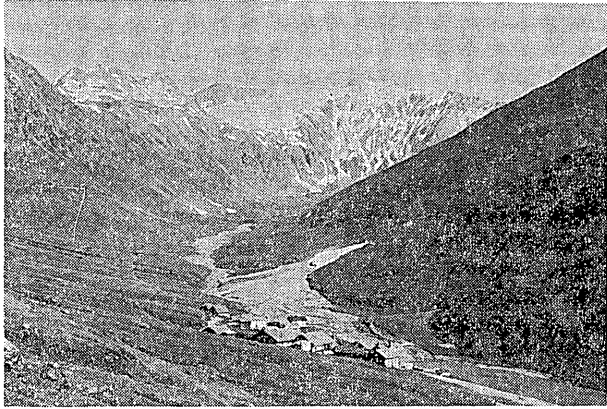


ユフの家畜小屋とその壁に積まれた燃料
レンガ状に刻まれた Getrocknetem Schafmist
は一部崩れている。不潔感はない。

森林上限界は谷壁斜面で約 2,100m に止まっている。

森林限界を越えた Ober Tal では燃料としての木材が欠乏している。そのため羊糞が燃料として採用されている。家畜小屋の前には肥料槽があり板壁で囲まれている。牛糞は Wies の肥料となるが山羊糞は燃料となる。

家畜小屋の中には一部柵にかこまれた所があり、そこには山羊が密に追いこまれ、糞は固く踏みつけられる。これは Schroteisense という大鎌で大きくレンガ状にきざまれて家畜小屋のフロントで乾かされる。Gasthaus Edelweiss 前の Stall の外壁には整然とした Schafmist が積み重ねられているが、乾燥したわら屑に似て不潔感がない。しかし最近ではこれに代るプロパンガスの使用も始まっている。



ユフ 遠景

Jufer Rhein 下流部から西方にユフを望む、村から西北に Wiese の中を走る小径は前方 Stallerberg を越える踏分道、白く光る氷河の下方は Alp である。

◎ ユフの草原

アルプ経済とは山地の草木に依存する経済であるが、特に草地は貴重な資源である。

ユフの住民は住宅付近に Heimalp を持つが、ここには個人所有の Wiese があり、集落の上下から 2,500m の高さにまで広がっている。Wiese は肥培採草地で 2 年に一回施肥され、丈（たけ）の高い香りのよい牧草が年 2 回刈り採られるが、この干草は冬季舎飼の時の飼料となる。

Alpe は村の共同放牧場である。ユフに最も近い Kuhalp はユフの西部にある二棟の Alpengaden から上流 500m までで、ここで日中放牧された牛や山羊は日暮には村付近の Stall に帰る。Ochsenalp はユフラインの上流右岸の Foppenhorn から北西の Mazzaspitz に至る山地で、ここは草は短かく露岩の多い所であるが、諸河川の谷頭では飲水が得易く、牝牛の放牧場となっている。また Flühalp は同名山地の北方から Stallenberg に至るまで、牝牛と牡牛は 6 月 10 日

アルプスの高距山村ホッホタル アベルスのユフ

～12日に放牧され、ユフ以外の牛は8月25～26日に帰村しはじめるが、ユフの牛は9月12～15日まで放牧される。

V 家族構成と経営規模

1971年ユフには4戸、18人が居住していた。そしてその中の一戸は下ユフに、他の3戸は上ユフに在る。各家々には Stall や付属建物があり、全体として明らかに Weiler である。

次にユフの家族構成を見てその労働力を推察にする。

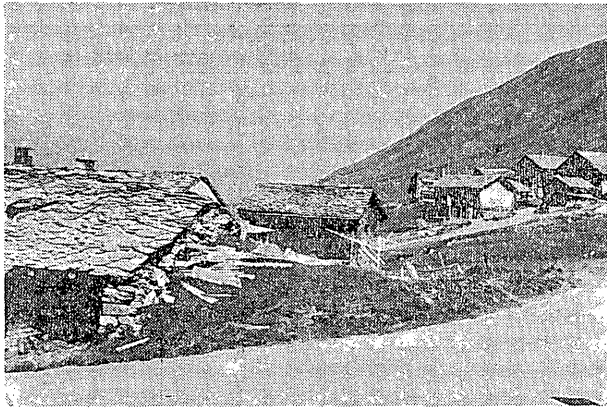
Unter Juf の Klaudio Rutzi 家は父母、子息2、娘1、主人の妹夫妻と甥1、姪1の9人家族であり、Ober Juf の Rudolf Menn 家は父母、息子2、娘1、姪1の6人家族、Agata Kunfermann 家は80歳の未亡人とその弟の2人家族、Ursula Hartmann 家は老婆1人の家である。

以上で明かなように計18人のうち労働力となり得ない人は老婆2人だけである。

1948年、最初に越年定住したルドルフメン家は6人家族の純農家であり、学童1人を除く5人の家族労働で牛40頭、羊類15頭、豚2頭を飼育している。Heimwiesen は180頭の牛の飼育が可能であり、その限界はアルプの下限にまで及んでいる。住宅付近の Kuh Stelle 2棟は越冬用であり、Gadenstätten はアルプに7つを準備している。石造の避難小屋は牧童のためのものであり、アルプで Alpen Käse の製造も行なう。

干草造りの省力のためには機械の導入も行われ第1表に示される諸機具・施設を持っている。R家の隣の納屋にはイタリー系の家族4人が住んでいた。一家はR家の主人の妹家族で、イタリーの Como に近い Dubino の住民である。7～8月には兄の家の干草刈り、放牧作業を手伝い、9月には帰郷するという。夫人の外はドイツ語を語れないが、夏期夫妻と子供2人でユフの季節的の人口を増加させている。この事実はユフの婚姻圏がイタリー北部にまで及ぶことを確認し得た一事例である。

Unter Juf の Klaudio Rutzi 家は9人家族で、牧牛の外、Gasthaus Edelweiss



Unter-Juf の小屋

壁も屋根も Bünderschiefer の片岩板で構成されている。壁を覆うように積まれた土砂堆は Ebenhöch の小型のもので防崩雪用である。右手の Weiler は上ユフの一部である。

を営んでいる。家畜飼育用の諸施設・機具は第1表の通りで、15頭の牛と30頭の山羊類を持ち、3歳牛以外は姪や男児が近くのアルフに追いつ方には帰村する。

これ等の牛や山羊乳から造られるバターや Käse, Ziger は総てが自家用で旅客の食卓に供せられるのもこれである。

K氏は付属建物として農具小屋2、家畜小屋3を持つが、アルフには Gaden 8を持つ。自宅南側の二つの Ställen は現在内部改装して Jugendherberge として使用し、また新築2棟の Gastzimmer は一は若人用に他は一般旅客用としている。

また Pension の二階はレストランであり屋外のテラスカフェと共に夏の日にユフを訪れる人々に休息とインフォメーションの場を与えている。

ここの保養・観光客は朝来て夕方の Postauto で帰る者が多く、Pension の客は多くない。常時10人前後であるが、冬のスキー客は更に減少する。レストランは旅客の社交場で、ここで各地方カントンの若人や老人夫婦、スイス以外の国々

アルプスの高距山村ホッタル アベルスのユフ

第1表 ユフの牧畜経営規模

	Rudolf Menn	Kaludio Rutzi	Agata Kunfermann	Ursula
Kuh	40	15	0	0
Schaf	15	30	0	0
Schwein	2	2	15	0
Ställen	2	3	—	0
Gaden	7	8	—	0
Wiese	180 Stück	viele Stück	etwas	auch
Transpoter	2	1	—	0
Mahen Maschine	2	1	—	0
Heurauppe	viel	1	—	—
Gebläse	1	1	—	0
Kreiselheuer	1	0	—	0

からの来訪者のインフォメーションが行われる。夕食をとりながら 6~9 時までの歓談で得た筆者の Avers に関する知識は大きかった。

一方 Jugendherberge は国内学生やアメリカ大陸からの Wander Vogel も交えて賑っている。しかしその数は不定である。

主婦と娘は旅客の接待に忙しく主人も時には手伝っている。

こうして Rutzi 家はアルプ経済として二次的な Gasthaus 経営に乗り出しユフをして休養集落たらしめる Pilot となっている。

Ober Juf の新しい旅館 Agata Kunfermann 家は古材利用の二階建住宅で、1960年代までは Hotel Alpen Rose を統営していたが、主人 Paul の没後は閉店し、80歳を越す未亡人とその弟が古くから持っていた幾区画かの Wiese と14頭の羊によって生活している。

妻入の二階の窓の上に Lebensgefehr と書かれた木札が打付けられている。これは冬の積雪で危険状態となる家屋の表示で、das Leben ist gefährlich の意である。空室の多いこの建物がユフの過疎化を促す素因とならねばよいがと思われた。

Alpen Rose の前の古い建物は校倉式構造の片岩板をのせた屋根をもつ住宅で、

Ursula Hartmann が唯独り年金生活者として生活している。かつては若干の Wiese を持っていたらしいが。

以上の4軒のほか、最近 Jufer Rhein の川辺に新たに Sommerhaus が建てられた。これは Chur の住民がこの高距集落と付近の Wiese や Alpe の景観に引かれて夏期保養のために建てたものである。

Weiler Ober Juf の最西端に一戸の Dopferhaus が認められ、かつては二家族が住んでいた。しかし現在は空屋となって閉ざされている。

さらに Gasthaus Edelweiss の東方 500m には二個の Alpengaden がある。付近に 2~3 人の草刈を見たが、これが Alpengaden を Maiensäss として利用している季節居住者か否かは確認できなかった。

Ⅵ 生活水準

ユフの住民はスイスドイツ語を語り、一部方言的にロマンシュを使うローマンカトリック教徒である。

彼等は Winterdorf の時代から Mühlbach の急流で水車を廻し自家用パンのための製粉をしていた。原料は下流域の Rovedero, Thusis 方面から入手していたが、現在はパンを下流部の町から買っている。自家の羊毛を原料として編物糸を紡ぎ厚布を織っていたことは、各家庭に残る紡績車や織機からも推察できる。

彼等はまた馬鈴薯を新しく開墾した畑で試作してみたが、収穫は少なく質の悪い球根ばかりで家畜の飼料にもならず完全に失敗した。春の霜害と夏の低温とが生育を阻止したからである。

試作の中で最も収穫の可能性の大きかったものはサラダ菜、ハウレンソー、フダンリー、白カブ、ダイオーなどであり、Ober Juf の東の小さな菜園に作られていた。

以上のような自給自足統済に依存していた住民は、Rudolf Menn 以外は重要生産品のバター・チーズ・Ziger 等も殆んど自己消費し、その一部を高級消費財取得のための購入費代に売っている程度であった。

アルプスの高距山村ホッホタル アベルスのユフ

住民は生活必需品を Cresta まで買いに行く。特に高価な貴重品はさらに下流の Andeer か鉄道沿線の Thusis まで下らねばならない。交通機関としては1日2往復の Postauto が唯一の脚である。

ユフには未だテレビがない。Edelweiss で一個のトランジスターラジオを見たが、これも必要時にニュースを聞くだけであり、電気洗濯機は見かけたがステレオはなかった。

環境衛生では下水道施設はない。しかし週2回塵芥蒐集車が巡廻する。冬の除雪車については既に述べた。

生活交渉圏は Avers 谷沿に Rhein 河谷にまで及ぶが通信量は稀少であり。ユフの Postamt の戸口に掲示された次の郵便・電報取扱の時間表でその量が推察できる。

第2表 Post und Telegraph

	Mon-Freitag	Samstag	Sonntag
Winter	9.30—10.15 15.30—16.00	9.30—10.15	Geschlossen
Sommer	7.30— 8.00 14.30—15.15	7.30— 8.00	

Ⅶ 課税問題

標高2,130mのユフに終年定住を可能ならしめた一因に課税問題がある。

われわれの納税は主として固定資産税と所得税であるが、土地生産性の異なる低暖地と高冷地の住民に、公平の原理に基いて同一額の収入に同一率の課税がなされる不公平を問題にする日本人は少ない。

スイス連邦では低暖地と高冷地では課税率に差をもうけ、高冷地の住民には低率な課税をしてその生活を保証している。

Am Bach 在住の Avers の Gemeindeamman (Gemeindepräsident) の話では、Avers の住民は Kanton Graubünden の課税率の90%で課税され、低暖地

よりも1割税負担が軽いとのことである。

ユフの住民が日本より高緯度の L. 46°26'N. しかも2,130mの高距に終年定住集落を立地し得た一因はここにある。

VIII 人口停滞

1925年、ユフには15棟の納屋と3棟の非定住民家があり4人の住民が居た。1948年には終年定住集落となり1950年には5世帯19人の Weiler となった。そしてアルプス最高の村と言われた。1959年人口は24人に増加したが65年には5世帯17人に、71年には4世帯18人と停滞している。

ヨーロッパアルプスの人口減少は既に半世紀も前からフランスアルプスに始まっている。Durance 川上流のイタリーとの国境に近い山村での過疎化は甚だしい。

ユフに使われなくなった Stall や空屋が生じたり、寡婦独りの世帯が認められるのは気に係ることである。

Jufer Rhein の谷の草地やアルプはユフの住民だけに所有権があるのではない。ユフと Am Bach の間を見ても分る通り、個人の Wiese や Stall が 2,300~2,500m の高地にまで展開するのは、人口増加による土地所有権の分割にも関係あるものと思われる。そして谷の人口増加はアルプ草地の劣悪化を招く一因ともなっており、これはアルプ統済の行き詰りともなる。

ユフの人口停滞はアルプ経済の近代化によって打開しなければならない。

IX ヨーロッパアルプスの高距限界集落

ユフの海拔高度は G. Schwarz によれば 2,186m と示されているが、Ländeskarte der Schweiz 1:50,000, Julierpass 図幅では 2,126m, 他の Topographischen Atlases der Schweiz 1:50,000, Bivio 図幅には 2,133m と記載されている。またスイス百科辞典 7 巻 (Encycloos-Verlag AG, Zürich 1945) では 2,135m となっているが、一般観光客用の Schweizer Reisepost の Wanderungen Gräubünden には „höchstgelegene gänzzährig bewohnte Siedlung Juf (2,130)“ と

説明されている。いずれにしても 2,130m 前後という高距集落はヨーロッパでもそう多くはなく Juf は居住の最上限にあるものと思われた。

しかし海拔高度としては Landeskarte der Schweiz 1 : 25,000, La Stretta 図幅に1,240~1,250mの所に Le Baite の小村が認められる。Le Baite は Trepalle 村の一部で, Trepalle はイン川上流の支谷 Späle の更に副支谷 Valle de Livigno にあり, イタリア人の村である。

多数の家畜小屋や納屋が単独かあるいは 2~3 の小集団を作って散在しているが, 村の中心部には学校・教会・郵便局と若干の商店のほかガソリンスタンドさえある。

Le Baite には終年約 20世帯が居住し, 季節労働者としてスイスへ渡り, あるいは近くの発電所でアルバイトする者もある。

Juf と Le Baite とはその高距差僅に 10m余で, ヨーロッパ最高の終年定住 Weiler として, 山地開発の先端集落として, その優位を競っている。

X 結 び

Hochtal Avers はスイスの 代表的高距山村のある所である。この谷奥の Juf の調査によって知り得た点を要約すれば次の如くである。

- ① ユフはアルプスで最も高距にある定住集落であり, アルプ経済によって生計を立てている。
- ② ユフの自然環境は低暖地に比し, 到達度において, 土地生産性において劣っているがそれをカバーしているものがアルプ経済である。
- ③ Obertal の開発の歴史的過程が一部古い孤立荘宅の 壁のラテン文字から知り得た。それは Maiensäss として使われた住宅と Ställe が開拓先端として谷奥に前進し, 更にそれが環境に適応して終年定住集落となった。
- ④ 4 世帯18人のユフは在来の自給的アルプ経済から脱却して, 近代的経営に移らなければ人口停滞ひいては過疎化がおこり易い。
- ⑤ ヨーロッパアルプスにはユフに比すべき高距山村が多く, イタリア側の Le

Baite は高度においてユフを越えるかも知れない。

わが国の山地集落よりも高緯度にありしかも 海拔高度の高い Hochtal にスイス山村の立地可能なのは、巨大な Bergmass の気候への影響もさることながら、園耕とアルプ農業という土地経営形態の相異に基く所が多いと思われる。即ち人口稀薄な広大な肥培草地と山地牧場の存在が重大なる素因である。

Gemeinde Avers の人口密度を見れば 92km² の面積に僅かに153人が居住しているだけである。住民は自己所有の Wirse の面積を広さの単位 ha で表わすのではなく飼育できる家畜の頭数 Stück で表現するほどである。

スイスアルプスにもフランスアルプスに次いで山村の過疎化が起りつつある。過疎対策はアルプ経済の近代化の外には採るべき方法を知らない。

ユフでは以前 Pension の亡祖父は山案内人をしてしたが、現在は郵便物の取扱いをしたり、旅館経営に乗り出して収入の増加を計っている。スキーとワンダーフォーゲルを好む国民性は第三次産業の発達に寄与するものとは思われるから休養観光産業の導入も当然計らるべきである。更にまた国家の高連山地住民への課税優遇についての政治的因子も良好でなければならない。

擱筆するに当り筆者のアルプス行を刺激され研究者を紹介された上に、渡欧にも便宜を与えられた駒沢大学教授上野福男博士と東京大学名誉教授多田文男博士に深謝致します。

また Zürich 大学の Hans Bösch 教授と岸本治子教授からは現地調査地域の選定や資料蒐集に御力添を戴き、ユフではアベルスの村長やアルプニスト Hedy Barandun, フランス系 Heinz Schätti 夫妻, Edelweiss の Ursula Luzi や牧童にまで質問に答えて戴いた。Ich danke Ihnen für Ihre Freundlichkeit!

この小論文を1978年3月15日永眠された多田文男先生の霊に捧げます。

アルプスの高距山村ホッホタル アベルスのユフ

参考文献

1. Gabriele Schwarz : Allgemeine Siedlungs-geographie. S. 5, 1956. (*)
 2. Karl Suler : Ist Juf die höchstgelegene Dauersiedlung der Alpen?
REGIO BASILIËNSIS IX/1. 1968 S. 238—290.
 3. N. Forrer und W. Wirth : Juf (Avers) Der SCHWEIZER GEOGRAPH Nr. 7
1925 Oktober. 1925 November.
- (*) Die höchste alpine Dauersiedlung ist Juf in Graubünden (2,186m), dass nur
24 Einwohner besitzt.